

産業革命とスリランカの国際観光

根橋 正一

はじめに

2003～05年度の3年間、学術振興会科学研究費補助研究「アジア諸国における観光文化に関する包括的研究（研究代表者：根橋正一，研究分担者：米田和史・八田正信・東美晴・朱思琳・呉軍）」に関わる調査として2回にわたってスリランカを訪れ現地調査をおこなった。この間2004年12月26日に発生したスマトラ沖海底地震に伴う津波の被害はわれわれの調査対象地にも及んだ。研究報告書は06年3月に刊行したが、それにはスリランカに関するデータは比較的少なく、未公開の資料や調査結果はまだわれわれの手元にある。本稿はこの研究に関連して収集したいくつかの資料，文献を用いて，スリランカにおける国際観光の形成について論ずる。

アジアの国際観光はヨーロッパ列強の植民地とともにやってきた。本稿では，ヨーロッパ世界経済のアジアへの拡大とヨーロッパ人のアジアの旅行目的地化の条件となる植民地都市やリゾート地の形成に関して述べる。18世紀後半に完了するイギリスの産業革命は，ヨーロッパ世界経済がインド世界経済を呑み込み，イギリスを中心とする世界経済分業の一部として編入するための準備となった。それ以前，インド製の綿織物はヨーロッパに流入し，ヨーロッパの繊維工業はこれに対抗することができず，インドはヨーロッパに対して経済的に優位な関係にあった。産業革命と呼ばれる木綿工業セクターを中心とした一連の技術革新は，このヨーロッパーインド関係を改変することになったのである。技術的に優位を確立したイギリスは，インド世界を政治的，経済的に支配することになったのである。ヨーロッパ人のアジアへの国際旅行の背景となる，産業革命からインドへのヨーロッパ世界経済の拡大については，1章で論ずる。

2章で述べるのは，われわれが研究対象としてきたスリランカについてである。スリランカはセイロンと呼ばれるインドの南の海上に浮かぶ島であるが，17世紀以前ポルト

ガルやオランダが島南端の港ゴールを基地として、経済活動に介入して経済的な利潤を得ていたにもかかわらず、ヨーロッパ世界経済に組み込まれることはなく、依然として南インド経済との強い関わりの中で行き続けていた。しかし、18世紀後期からのイギリスの進出によって、島はプランテーション経済に巻き込まれ、イギリスの必需品供給とイギリス製工業製品の消費マーケットという、世界経済分業の組み込まれることになった。このスリランカの経済構造の変動について論ずるのが、2章の課題である。

次に眼を転ずるのは、この植民地経済の中、どのような都市、すなわちイギリス人、ヨーロッパ人の居住コミュニティやレジャー地域が建設されていった点である。イギリスからの植民者たちが自分にとって居心地のよい都市空間、生活空間が形成されれば、そこはおのずと本国の人びとにとって安全・安心・快適な旅行目的地となる可能性が発生する。各州、それぞれのリゾートエリアとして諸地域について具体的に論ずることにしよう。また、植民者たちの生活にも言及しなければならない。以上が3章の課題である。

第1章 産業革命とアジアへの進出

先に拙稿（根橋，2006a）で述べたように17、18世紀においては、ヨーロッパ世界経済とインドや中国の世界経済圏はそれぞれ自立的で相対的であったが、インドや中国のほうがヨーロッパに対して優位であった。インド産の更紗木綿がヨーロッパで流行したり、中国産の茶や陶器がもてはやされたりして、それらの物産の対価として支払われるため中・南アメリカで採掘した大量の銀がアジアに向かって流れていた。インドの木綿に対抗できるようなレベルの技術をもった製品の開発がなければ、ヨーロッパ世界経済はいくら植民地収奪をしても間に合わない状態であった。こうした状況を背景として産業革命と呼ばれる技術革新が進展することになった。この点に関しては1節において述べる。特に、ポルトガルやオランダの重商主義的な世界戦略に着目して、イギリスのとった戦略との比較的に分析する。産業革命によって最新の技術をもった機器製木綿工業を手に入れたイギリスは、新たな世界戦略を推進し、世界を手中にしていたのである。そして、パクス・ブリタニカと称されるヘゲモニー国家イギリスによる世界支配の時代がやってくることになる。このような動向についても本章2節で整理することになる。

1節 イギリス産業革命の背景

17世紀に完成を見るイギリスの羊毛工業であるが、世界戦略の中では特にアジアにおいては戦略的な商品にはなりえなかった。アジアにはインドおよび中国を中心とする世界経済が存在していたし、両者に対してイギリス産の羊毛製品では対抗できなかった。

なぜなら、インドには木綿製品があり、中国には絹製品があつて国際競争力の点ではそれぞれ圧倒的な力量を持っていたからである。ここでは、(1) イギリスの戦略商品である羊毛製品について整理するとともに、(2) インドの綿製品とイギリス・フランスなどを中核とするヨーロッパ世界経済との関係、および(3) 産業革命を経て機械綿製品を戦略商品としてアジアに進出するにあたって、選択された移民型植民地、資本主義型帝国主義について言及し、その特徴である移民について状況を整理する。

(1) ヨーロッパ繊維工業の展開

長い間、ヨーロッパにおいて織物はその産業的な面において大部分は奢侈製品であつた。中程度の品質のものでさえ、それは高価な品物であつて貧しい人びとは自分で製造する方を選ぶことが多く、買うとしてもつつましくしか買うことはなかつた。18世紀末のイギリスの綿織物産業が提供する綿織物をもって、やっと民衆が織物業の顧客となつた。ヨーロッパにおける繊維産業の発展を見ると、13世紀に羊毛といえばネーデルラントとイタリアの両者であつた。つぎの14世紀には断然イタリアであり、「イタリア・ルナサンス、それは羊毛なのだ!」といわれた。羊毛の次に、絹が圧倒的な優位を占めるようになり、イタリアが16世紀に産業的繁栄の最後の時を享受できるのも絹のお蔭であつた。しかしこの貴重な織物は北方へ広がり、スイス諸州(チューリッヒ)、ドイツ(ケルン)、オランダに、イギリスに、フランス(リヨン)に広がつた。しかし、17世紀にはまた変化が生じる。イギリス製の上質な毛織物が1660年ごろ、絹を押しつけて流行した。そして、ついに、最後の戦士にして新しい勝利者である木綿が登場する。それは、ずーっとむかしからヨーロッパに存在したが、ヨーロッパには見られなかつた捺染と染色の技術によってインド更紗が爆発的な流行を引き起こしたのである。インドは、その織物でヨーロッパを埋め尽くすことになつた。そこで、ヨーロッパは是が非でも、みずからインドを模倣し、木綿を織り捺染する技術をもたなければならなかつた。こうして、木綿はイギリス産業革命の始動に非常に大きな役割を演じたのである(Braudel, 1979=1988: II 20-22)。

(2) ヨーロッパにおけるインド綿ブームとキャラコ禁止法

イギリスが綿織物業を一気に発展させることになつたきっかけは、東インド会社がインド産綿布を大量に輸入し、その流行をつくりだしたことにあつた。その後、「キャラコ使用禁止法(Calico Act)」によってこの輸入は禁止されたが、その間に国内の綿織物業が発展し、国産綿布がインドものに代替することになつた(村岡:18)。

もともと綿布などのインド織物はインド洋交易の重要な商品であつたが、17世紀の半

ばになるとヨーロッパ市場にも大量に輸出されるようになった。1670～80年代にはイギリスでキャラコ熱と呼ばれるインド産綿布ブームが起こった。キャラコというのはカリカットの地名から出たもので、インド西海岸マラーバル地方の綿布をさしたが、インド産のすべての綿布がこの名前で知られるようになったものである。イギリスではキャラコは麻（リンネル）の安価な代替物として急速に広まり、ブーム状態にまでなった（辛島2004: 304）。インド綿布は輸出用に東洋趣味の文様が施され、ベッドカバー、テーブル掛け、下着、婦人のファッション・ドレスとしてイギリスに入ってきた。インド木綿は安くて美しく、軽快にして洗濯も容易であったから、当時の異国趣味の流行も手伝って、たちまちのあいだに普及した。インド木綿の輸入はヨーロッパに「衣料革命」を引き起こした。インド木綿の輸入は伝統的国民産業であった羊毛工業や絹工業の利害と抵触し、イギリス国民経済を危機に陥れるものとして、製造業者に深刻な危機感と脅威の念を抱かせた。その結果、1700年にキャラコ輸入禁止法が公布され、未染色のものを除きインドからのキャラコ・絹織物の輸入は禁止された（角山：108）。さらに1720年に出されたキャラコ使用禁止法が、衣服・室内装飾・調度類いっさいのものに綿布を使用してはならないとした。実際にはこれらの法律には多くの抜け道があり、インド綿布輸入は減少しなかった（辛島2004: 304）

この使用禁止法は54年間施行され1774年解除となったが、この間に国内では輸入綿布に対抗する資本および技術の準備が進められ、70年代に入りその目途がたって法解除の運びとなったのである（山本：111）。この54年間にイギリスでは、綿織物業が発展し、国産綿布がインドものに代替された。カリブ海や、後には北米南部のプランテーションで黒人奴隷によって生産された綿花が豊富に供給され、製品の輸出先もドイツをはじめとするヨーロッパほかにあつて、綿製品の生産は発展したのである。しかしながら、1774年までのイギリスの綿工業は取るに足りない存在であった。産業革命の技術革新の後1802年になると輸出で毛織物を圧倒して経済全体の主導部分となった。これにはいくつかの条件のほか、直接的には一連の技術革新と経営形態の改革のためであった（村岡：18-19）。

（3） 産業革命における綿工業の位置づけ

綿工業における技術革新は、1750年代に綿工業に導入されて普及したジョン・ケイの飛杼に始まる。これで織布の効率が良くなった結果、撚糸不足がおこったが、これが契機になって、1764年に発明されたジェニー紡績機や69年に特許が承認されたアークライトの水力紡績機などが出現、79年にはクロンプトンがミュール紡績機を発明し、ほぼ近代紡績機の原型をつくった。このため、逆に織布の遅れがめだちはじめ、1785年のカートライトによる力織機の発明につながった。この1785年という年はアークライトの特許

を無効にするという決定があり、水力紡績機はいきよに普及したうえ、ボルトン・ワット商会の蒸気機関がはじめて紡績機に使用されたのである。水力に頼っているうちは、工場立地には制約があるが、蒸気機関はその制約を一掃し、多数の工場の集中する大工業都市がランカシャを中心に発展するようになった（村岡：20）。

機械と工場制に立脚したイギリス綿工業はコストを下げるができるようになり、インドの綿工業をはじめすべての競争相手を圧倒し、国の内外に市場を拡大することが可能になった（村岡：21）。

表1 イギリスからの輸出

年	1784-86	1794-96	1804-06	1814-16	1824-26	1834-36	1844-46
輸出総額	12,690	21,770	37,535	44,474	35,298	46,193	58,420
綿製品	6.0%	15.6%	42.3%	42.1%	47.8%	48.5%	44.2%
毛織物	29.2	23.9	16.4	17.7	16.3	15.2	14.2
他の繊維	10.6	10.6	7.4	8.2	9.1	9.8	10.9
繊維以外	38.3	37.4	23.8	17.5	19.2	17.6	18.7
食品・原料	15.9	12.5	10.0	14.5	7.6	8.9	12.0

注：輸出総額の単位は1000ポンド

出展：村岡健次・木畑洋一編『世界歴史体系 イギリス史3 近現代』山川出版社，1991年，19ページ

産業革命の結果、綿布の流れは逆流しイギリスからインドの方向へと転換し、インドからは原料綿花がイギリスに輸出されることになった。その転換点は、1820年ころと考えられるという（表2参照）。

表2 綿布輸出入の方向転換

年	イギリス向けインド綿布輸出	インド向けイギリス綿布輸出
1814	1,266,608 (枚)	818,208 (ヤード)
1821	534,495	19,138,726
1828	422,504	42,822,077
1835	306,086	51,777,277

出展：辛島昇・坂田真二『世界歴史の旅 南アジア』山川出版，1999年

19世紀になると産業革命によって増加した工業品の広範な市場を確保するために、新たな市場開拓が必要となった。特に、1806年に始まるナポレオンの大陸封鎖政策によって、当時イギリス工業品輸出額の約3分の1を吸収していたヨーロッパ市場が閉ざされたためイギリスの輸出品は合衆国・ラテンアメリカ・アジア・アフリカ・近東などに新たな市場を求めた。その結果、1784-86年から1814-16年の間のアジア向けは1.5倍の増加を見た（秋田：26-7）。

2節 インド経済圏、スリランカの経済分業

産業革命を経て機器製綿製品を戦略商品とするイギリスは、その資本主義帝国主義を持ってアジア各地への進出を企てることになる。ヨーロッパ世界経済のヘゲモニー国家であるイギリスの世界経済戦略は、インドや中国などアジア各地に対するヨーロッパ世界経済の拡大という結果をもたらした。すなわち、西欧諸国を中核とする世界経済分業にアジア各地を編入していくことになったのである。ここでは、ヨーロッパ世界経済に編入される以前のスリランカ、インド経済圏の様子について概観しておく。われわれの研究対象であるスリランカがどのような経済的環境のなかにあったかを理解することは、スリランカの過去の状況を理解し、どのような変動が発生していたのかを論ずるのに必要であるばかりでなく、未来を考察するにも重要な手がかりを提供してくれるからである。

(1) ではイギリスが植民地支配を進める以前のインドおよびスリランカの経済構造について概観し、つぎに(2)でポルトガルやオランダが支配して、シナモン交易や現地交易で利益を得ていた状況について整理する。

(1) インド経済圏の中のスリランカ

オランダ・ポルトガルがスリランカを支配していた時期、スリランカはインドとの経済関係をもって存在していた。

1659年にカルピティヤは占拠された。東海岸の港は1666～1668年のオランダの支配の下にあった。セイロン島の貿易体勢は、島からのシナモン、象、びんろう、聖螺、真珠を輸出し、綿製品、香辛料、すず、亜鉛のほか鉱物などを輸入したが、米が最大の主要な輸入品目であった (Silva : 138)。

(2) オランダ時代のスリランカ経済

セイロンの伝統的な交易はおもにインドとの間でおこなわれており、これがキャンディ王国の生命線でもあった。セイロンはインド産の綿織物を最高技術製品とする、インド世界経済圏の一部を構成していたのである。

オランダはこの伝統的な交易に介入し、オランダ東インド会社がこれを独占してインドーセイロン間の貿易利益を手にしていたのである。加えて、オランダはセイロンの生産品をヨーロッパおよび東南アジア・東アジアにも投入することによって商業的な利益を得ていた。ここではセイロン・インド間の伝統的な交易について整理し、それがオランダ東インド会社の独占になっていたことを見ていく。

ウォーラーステインがいうように (Wallerstein1980=1993: 327)、オランダはインド

世界経済のもつ巨大な商業利得に関して、インド世界経済をヨーロッパ世界経済に編入することはなく、現地の伝統的な交易網をその担い手たちから篡奪したに過ぎなかった。

セイロンとインドとの間の伝統的な交易は3つのルートでおこなわれていた。すなわち、ベンガル湾貿易・インドに西海岸貿易・南インド貿易である。この3ルートからの主な輸入品は米であったが、なかでもコロマンデルからの米は安価であったこともあり、量も最大であった。ベンガル湾貿易では、絹やモスリンなどの織物のほかバター、砂糖、植物油、そのほか日用品を輸入し、セイロン島の特産品を輸出していた。17世紀をつうじて、さらに18世紀初期までの間には、インドの需要に応じてかなりの頭数の象がこのルートで輸出され、収支バランスをとるための重要な商品となっていた。このほか輸出品は、ビンロウ、聖螺、コヤス貝、真珠そしてスパイスであった (Silva: 174)。

インド西海岸ルートについてみると、主な輸出品にはココヤシの皮の繊維やロープが含まれていた。西インドルートはセイロンにとって最も重要で、キャンディ王国の生命線ともいえる貿易であった。主な輸入品は織物であり、それは農民たちにも手が届く消費物を提供していたのである。同様に重要なのは島で不足していた米、塩、塩魚が送り込まれた。これらと交換されたのは、南インド全体で大きな需要があったビンロウである (Silva: 175)。

一方、スリランカとモルディブの間にも日常的な交易が続いており、オランダ支配の時期にも滞ることはなかった。スリランカはモルディブから、クンベラマスや子安貝をえて、インドやヨーロッパとの貿易に用いた。スリランカからはスパイスやビンロウ、米を輸出した (Silva: 175)。スリランカは、インドや周辺諸島との伝統的な交易システムをとおして島の経済を保っていたが、この貿易の担い手に関して大きな変動があった。

インド・スリランカ貿易のほとんどは外国人の手にあった。すなわち、いくらかのタミール人、マラバリ・ムスリムやチェティ人で、チェティ人やヒンズー教徒たちは最大の商人集団であった。彼らの多くはコロンボやゴール、ジャフナに住みつきインドとの交易の重要な結節者となっていた。ジャフナにいたヒンズー教徒のタミール人もまたブローカーあるいは代理人としての役割を演じた。マラバリ・ムスリム人商人は血縁関係からマンナー、ゴール、バツティカオラに住んでいた (Silva: 175)。

17世紀の初期から中期にかけて、この貿易が政治的に阻害されることはなかった。軍や海軍の活動が発生した大きな港においても、このようなことのない小さな港においても交易は認められ続けていたのである。時には、コティヤやバティカオラといった東海岸の比較的平和な港にオペレーションを移動することはあったが、それはキャンディ王国との交流に便利であったからであった。しかし、1650年オランダ東インド会社がコロンボ、ジャフナ、ゴールといった主要港を支配して以後、1659～70年にかねがが自らの港に対する権威を全島に拡大した時期に、内陸部にその勢力が囲い込まれたキャンディ王国の地位は衰退した。1670年には、島の貿易の大部分がオランダに独占されることが

決定的となり、扱われる品目の重要度にも変化が現れた。いまや、ヨーロッパにとって最も重要な品目であるシナモン、および最も重要な食料である米が東インド会社の独占となった。それ以前の織物輸入およびピンロウや象の輸出という主要3品目の貿易に対しても同会社の支配するところとなり、前2者はキャンデイ王国に直接的な影響を及ぼし、象輸出は間接的な影響を及ぼしたのである (Silva: 175-176)。

オランダの支配は商業的な利益を奪うことが主な目的であり、自らが入植、定住するわけではなく、現地産品を収奪し、運び出すだけであった。そのための根拠地としてゴールやコロomboのような商業的な施設とそれを守る砦を建設するだけであった。当時のゴールの様子およびシナモン収集と港までのルートなどオランダ支配時代のセイロン島の状況についてノックスの体験談は興味深い。17世紀オランダ支配時代のイギリス人船長ノックスの体験は捕らわれてから脱出するまで冒険物語になっており、そのなかでセイロン島の自然や植物に関する記述、社会制度や王国についての記録も含まれている。当時のセイロン島の様子を詳細に語る名著である。この書から当時すでにヨーロッパ人がセイロン島に滞在していたことがわかるが、決して彼らにとって安全、快適な旅行目的地ではなかったことをも知ることができる (Knox)。

第2章 スリランカの世界経済分業への編入

ここでわれわれが提起している国際観光の方向性とその範囲についての仮説を再確認しておこう。国際観光の流れの方向は、中心から辺境へ向かっており、その範囲はワールドシステムの範囲内において起こっている。すなわち国際観光はワールドシステムの中心から周辺に向かって移動するものであるというわけである。セイロン島を植民地支配したイギリスは、移民者たちの経済活動を通して、本国の工業生産物の消費地であり、かつ本国の日常必需品の供給地としてイギリス経済圏に組み込み、みずからの周辺としていった。それにともなって本国からの植民者たちの居住地、レジャー活動エリアの開発が進んでいった。そのような過程を経てヨーロッパ人にとっての安心・安全・快適な旅行、レジャー目的地が形成されていったのではなかったか。本章では、19世紀における経済活動とレジャー活動、国際観光旅行についてみていく。

スリランカがイギリスを中心とする国際経済分業に組み込まれていく過程を二つの段階を設定して概観する。植民地経済は本国の要求する経済分業を引き受けることを主な使命としているのであり、スリランカは具体的にどのような分業を引き受けたのかについて概観すると、イギリス本国が生産する綿製品をはじめとする工業製品の消費、およびイギリス本国の各層の人びとの日常必需品の供給とが植民地の基本的な分業ということになる。スリランカの場合、綿製品の輸入、消費と、プランテーション農業の開発により熱帯地域特有で、イギリスあるいはヨーロッパ市民の日常生活に必要な農業産品、

すなわちシナモンなどの香辛料のほか、コーヒーや茶の栽培輸出という役割をもって経済分業に位置を占めることになったのである。19世紀から20世紀にかけての植民地時期には大きく分けて二つの段階、すなわち主にコーヒーを供給する第1の段階と、茶生産を主要なプランテーション産品とする第2の時期とに区分することができる。本章では、この2段階に分けて経済分業の状況および、各地のヨーロッパ人居住について整理する。

これは、1860年代までは、セイロンの国際経済分業の位置づけはコーヒープランテーション産業によってコーヒーをヨーロッパ市場へ供給する役割および、木綿をはじめとするイギリスの工業製品のマーケットとしての役割を演じていた。当時のセイロン島に対するイギリスの経済的な支配、すなわちイギリスをセンターとする世界経済分業における位置づけはコーヒー栽培エリアのみがこれに組み込まれていたものであり、コーヒー・エステート、それを結ぶ幹線道路および鉄道、それにイギリス人植民者たちのためのレジュー都市がイギリスの経済的支配の範囲であった。

これに対して、1870年代以降広範なイギリス人の必需品である茶産業の興隆により、セイロンの経済的役割は、茶の供給と工業製品の消費市場という位置づけになり、同時にこのころから1900年にかけての時期に全島がイギリスの経済分業体制に組み込まれていくことになる。1905年当時のイギリスによるセイロンの経済支配状況、国際経済分業におけるセイロンの位置づけについて、各州別に整理する（3章）。

こうした19世紀前半のコーヒー産業の時期と、末期から19世紀にかけての茶産業台頭の時期とを区分して見ると、本国やヨーロッパからの国際観光者たちの目的地となる範囲はそれぞれの時期の経済分業体制に組み込まれた範囲の中であることが見えてくる。

イギリスのスリランカ支配が確定した1820年代から1870年代、経済的にはシナモンやコーヒー産業を中心としていた。

1 節 シナモン産業

1802年スリランカが植民地化されたとき政治的権力は除去されたものの、新たな植民地交易の独占は維持されていた。植民地政府と東インド会社は植民地経済を分割して支配していた。東インド会社は植民地の外部との貿易、とくにシナモン貿易を支配することによって影響力を持っていた。19世紀最初の30年間シナモンは植民地経済の主要産品であり、植民地財政収入の大黒柱であった。1802年東インド会社は、セイロンからヨーロッパ市場向けのシナモン販売の独占権が与えられた。ヨーロッパのシナモン市場においてセイロン産はこの30年間にわたって売り手市場で、確実な利益を得ていた。1814年以降、東インド会社の独占に代わって植民地政府がヨーロッパ市場へのシナモンの直接供給者となるよう議論が起り、それは明らかな圧力となっていった。1822年海外へのシナモン供給は植民地政府が直接おこなうこととなった (Silva: 239)。

セイロン島は世界的にみても最上級のシナモンを生産しており、当然のこととして

ヨーロッパ市場で独占的位置を占めていた。植民地政府はこの地位を維持した上で、さらに高価格を維持するために生産調整をするよう指導した。しかしこの高価格は他地域、とくにジャヴァやインドのコロマンデル海岸、マラバーなどにおけるシナモン産業の成長を促し、市場における競争を激しくさせることになった。これら新たな地域から供給されるシナモンはセイロン産よりも安価であった。さらに強いライバルとなったのは、南インド、フィリピン、オランダ領インド、そして中国南部であった。この競争に直面してセイロン産シナモンの価格は急激に下落し、投売り状態になった。この状況は1820年代後期に改善されたが、東インド会社のストックはしだいに減少していった (Silva: 240)。

それでもシナモンはまだ島の輸出経済の主要産品であった。シナモンの独占の廃止は1830年代になってからであった。コールブルックは政府財政の歳入増のために、シナモン1ポンドあたり3シリングの輸出関税を課したが、これによりセイロン産シナモンの海外市場における競争力はさらに低下した。その後関税は下げられる方向に向かい、1841年1ポンドあたり2シリング、1843年には1シリング、1848年には4ペンス、そして1855年には結局撤廃された。しかし関税が下げられ廃止されても国際競争力が回復することはなかった。

さらに資本をつぎ込んだり、栽培に科学技術を使ったりした結果、1840年代後半シナモン生産はようやく回復したときでさえ、コールブルックはシナモンは島の経済にとっては主要産業であり続けていると言わざるを得なかった。しかし、結局1840年代初期よりシナモン産業は明らかに衰退しはじめ、1833年当時に謳歌した地位を回復することはなかったのである (Silva: 271)。セイロンのプランターや小生産者はヨーロッパ市場の状況の変動に従属させられ、翻弄されたのである。

この陰で注目され始めたのがコーヒー産業であった。シナモンが政府の独占となり、自由な経済活動ができないなかで、プランターや投資家たちは他の産品を物色し始めていた。コーヒーもそのひとつであった。1820年代末までに政府、サー・エドワード・バーンズ総督が関心を寄せていたのである。そして政府みずからが、ペラデニア植物園に隣接した場所に200エーカーの実験的なコーヒー園を開設した (Silva: 243)。

2節 アメリカにおけるコーヒーの需要

コーヒー産業が注目される背景としてイギリスおよびアメリカのコーヒー事情について整理しておこう。

17世紀コーヒー熱はたちまちイギリス全土を呑み込んだ。1650年ユダヤ系レバノン人ジェイコブスが、オックスフォード大学で「新しもの好きな連中のために」最初のコーヒー店を開店したのが始まりであった。2年後にはロンドンで、ギリシャ人パスカ・ロゼがコーヒー店を開き、最初のコーヒーの広告を印刷した。彼は、コーヒーの薬効をお

おげさに宣伝した。1652年の広告は、コーヒーが消化を助け、頭痛や咳、体力消耗、むくみ、通風、壊血病を治し、流産を防ぐと主張した (Pendergrast: 39-40)。

コーヒーとコーヒー・ハウスはたちまちロンドンを席卷して、1700年にはロンドンのコーヒー・ハウスは2千軒を越え、どの業種よりも多くの店舗を持ち、支払う賃借料も最も多かった (Pendergrast: 40)。

イギリスの忠実な臣民である北アメリカ植民地の人びとは、本国のコーヒー・ブームを熱心に見習い、1689年にボストンに最初のコーヒー・ハウスが開店した (Pendergrast: 43)。

18世紀末頃には、紅茶がイギリス人のお気に入りの飲み物になり、アメリカの植民地にも、本国の東インド会社によって紅茶が供給されていた。ところが、国王ジョージ3世は茶やその他の輸出品から税をとろうと企て、1765年印紙条例を制定した。これに対してアメリカ人は抗議し、結局イギリス議会は茶に対する税以外のすべての税を撤回した。しかし、アメリカ人は茶の税を払うことを拒否し、代わりにオランダから密輸された茶を買った。これに対して東インド会社はボストンやニューヨーク、フィラデルフィア、チャールストンの各市に強引に大量の茶を送り込み、ボストンでは住民の代表が船を襲って茶を海に投げ込む騒ぎになった。1773年のボストン茶会事件である。この事件以降、紅茶を飲まないことが、愛国心の強いアメリカ人にとって当然の義務のようになり、おかげでコーヒー・ハウスは大いに繁盛した (Pendergrast: 44)。

1800年代の前半を通じてアメリカ人のコーヒーの嗜好はしだいに広まっていった。とりわけ、一時的に紅茶が手に入らなくなった1812年戦争 (対英戦争) 以降、その傾向に拍車がかかった (Pendergrast: 83)。1823年のコーヒー危機と供給過剰以降、コーヒーの価格は急落し、1821年に1ポンド21セントという高値から1825年の11セントにまで下がった。それから30年間価格は低いままであった。ジャワとセイロンはますます大量のコーヒーを送り出し、ブラジルも同様であった (Pendergrast: 85)。コーヒー栽培者たちを苦しめていた低価格のお蔭で、ヨーロッパ大陸やアメリカ合衆国で、下層階級の消費者が増加した。

南北戦争 (1861~65年) によってアメリカのコーヒー消費は減少した。連邦政府が輸入豆に4セントの税を課し、南部の港を封鎖して反逆者どもがコーヒーを入手できないようにしたからだ。戦争が始まるまでは、需要は徐々に増加していたが、生産のほうは何年も続いた低価格に嫌気がさして減少しつつあった。それが、戦争による価格の上昇に力を得て、生産者たちはそれまでの倍の勢いで生産に取り掛かった。最大の買い手が合衆国陸軍であったため、北軍が勝利するごとに活発な取引と価格の上昇に拍車がかかった。1864年までに政府が購入した生豆は4千万ポンドに達した。南北戦争は兵士たちにコーヒーを飲む習慣を植え付けた (Pendergrast: 86)。

南北戦争に続く15年間、アメリカに限らず世界中でコーヒーの消費と生産が互いに抜

きつ抜かれつ状態であったため高値がそのまま続いた。ジャワ、スマトラ、セイロン、ベネズエラ、ブラジルでコーヒー栽培が急速に増加した。コーヒーは西洋世界、とりわけアメリカ市民にとって欠かせない飲み物となった (Pendergrast: 102)。

3節 コーヒープランテーション地域

1820年代から始まったコーヒー産業への注目は、30～40年代にはセイロンの主要産業に成長した。1840年代の注目すべきセイロンにおける産業状況は、プランテーション農業の形成、とくにコーヒー生産、植民地経済であった。1830年代に本格的に生産が始まったプランテーション産品であるコーヒーは15年間に成功し、セイロン経済を変化させた (Silva: 268) のである。

1830年代後半、島内には2つのコーヒー中心地があった。すなわち、ゴールから16マイル離れたウデウガマヒルで、コロomboにベースを置く商人が経営していたプランテーションである。もうひとつは、キャンディ地域のガンボラ、ペラデニア、そしてダンバラである。ゴールのベンチャーは失敗したが、キャンディのダンバラ・プランテーションは成功した。ガンボラやペラデニアにおけるよりも商業的に成功した。

中央州 (Central Province)、つまりキャンディ王国の心臓部はプランテーション活動への集中が進んだ。1838年から1843年の6年間に、少なくとも130園のプランテーションが中央州に開設された。そのほとんどが、キャンディの30マイル圏内にあった。さらに1846年までに、500園ないし600園のコーヒープランテーションが島内に開設された。そのほとんども中央州に立地していた。1845年1月1日から1847年12月31日の3年間に、25,198エーカーから50,071エーカーへと増加していた。コーヒーのために500万ポンド近くが投資された。それは個人によっても、代理店によっても投資された (Silva: 269)。

ところが、1845年のコーヒー価格は下落した。本国イギリスにおけるコーヒー消費の減退、それにともない急激な価格の下落が起こったのである。1847-48年のコーヒー需要はオークランド・ボイド商会 (Ackland Boyd and Co.) のといった巨大店において下落したし、ハドソン・チャンドラー商会 (Hadson Chandler and Co.) のような小さな商店においても受注は激減した (Silva: 269-270)。

1850年代初期、いったん放棄されたコーヒープランテーションは再び活性化した。新たなプランテーションは、旧いプランテーションの再生から得られた信頼で次々に開設されていった。1847～48年のコーヒー経済の危機、つまり価格下落の間に新オーナーは開設することができた。スリランカにおけるコーヒー産業の再生は、イギリスにおける市場の状況の好転に依存していた。その後コーヒー価格は、1845年以前の最高値に戻ることはなかったにもかかわらず、コーヒー産業経営者たちには実質的な利益マージンはなかったとはいえ、経済的余力を持っていたのである。そして、イギリス市場における植民地コーヒー産業保護策が1851年に完全に排除されても、セイロンのコーヒー産業の

回復、再生を抑制することはなかった (Silva: 270)。1860年代、コーヒー産業はセイロンで最も重要な産業であり続けていたのである。

コーヒープランテーション時期の各地の状況についてみておこう。中央州とウヴァ・州についてみる。

中央州 (Central Province)

歴史的に見ても、財政的にも、魅力の点からしても中央州は9つの行政州のうちもっとも重要である。ここには、キャンディ、すなわち古代キャンディ王国の都があり、旧シンハラ王朝のもっと豊かな地であった。ビジネス面ではプランテーション産業の中心である。健康面についてみても中心的な役割を果たしていることで有名である。壮麗な山岳地域であり、アダムス・ピークやピドタラブラがある。世界的に見てもロマンティックで美しい山々が連なっている (Wright: 798)。

プランテーション産業のほとんどの部分はかつて奥の深いジャングルで、野生の象の群れ集う場所であった。日常的に何万人もの労働者が雇用されている。ヒル地域と海岸地域とを結ぶ道路を開発した、遠目の聞く支配者は結果として彼の労働者たちを解雇することを認めなかった。1825年、キャンディ付近にコーヒープランテーションが開かれ、コーヒー栽培が始まった。ジョージ・バードは翌26年ガンボラ近くでコーヒー栽培を開始した。1832年には、大きな変化はあった。すなわち、コーヒー・ブームが来たのである (Wright: 798)。その後、1845年、イギリスの財政危機がプランテーション産業にも影響を及ぼし、多くが経営不振におちいり、10年間それ以前の水準を回復することはなかった。コーヒー産業は寿命が延びたのである。「真珠の拡大」の開始である。ダンブラーやディコヤ、マヌケリヤは、サー・ハーキュレス・ロビンソンの援助の下に、1837年には34,000cwts (ハンドレッド・ウェイト)、12万ポンドを輸出していたのに対して、1868年、1869年、1870年の3年間は、繁栄期の高水準を記録した。これらの年はヨーロッパのコーヒー市場では、100万cwts少なくとも400万ポンドに相当していた。

この30年間に、熱帯産業の発展があった。ディンブラ・ディストリクトでは、1843年から開発が始まった。キャプテン・パリサーによって何本かのコーヒーの株が移植されたことによって始まったのであり、それはヌアラエリア開発と同じ時期でもある。コーヒーの苗はよく育ち、コーヒー・プランテーションが現実のものとなった。当初食料を調達できるもっとも近い町キャンディまで40マイルも離れていたにもかかわらず、そこにはまだ道路もなかった。しかし、その発展は加速度を増していった。1869～79年の10年間に、王の土地40万エーカー以上がセイロン政府から売りに出され、100万ポンド以上の収入があった。そのうち、10万エーカーがコーヒー栽培に活用された (Wright: 800)。

コーヒー産業の衰退の始まりとなったコーヒーの病気 (さび病) が始まったのは1869年であった。1878年の乾季はコーヒーの成長にとっても適していたため、プランターたち

は病気にもかかわらず、大豊作を得た。しかし、1881年、すべてがチリと化した。18ヶ月のあいだ、1,000人の所有者たちに分有されていた所有地の価格が低落し、1,200ポンドにまで達した。これを回復する努力したが、茶のお蔭で回復が可能になった。大量の茶を導入の実験によって着手した。1883～84年に、ダンブラーにおいて明らかになり、そして1890年までにはかなりの収益をあげられることが明らかになった。1890～96年は所有権移動が氾濫する時期であった (Wright: 801。)

ウヴァ州

ウヴァ・州は3,157平方マイルで、人口19万人、7人の族長のディビジョンに別れている。各ディビジョンは、30のコラールに分かれ、さらに副次的に162のアラチチとディビジョンに分かたれている。ウヴァ州ではプランテーション産業からの収入が最大である。バデュラ、マヅルシマ、モナラガラ、ハプタルス、ニュー・ガウウェイ、ウダプセラウアの各ディストリクトには、200園近いプランテーションがあり、4万人以上のクーリーが雇用されている。

1815年、ウヴァがイギリスの所有地に編入されたとき、キャンディの居住者およびキャンディ州委員会の下位レジデンスの管轄下にあった。1832年中央州が設置され、バデュラに補助的な代理人が設置された。そして、1886年に分離し、独立のウヴァ州になった。ウヴァの自然の美しさは、多くの作家たちによって称賛されてきた (Wright: 847)。当初ウヴァは狩猟で有名なところであった。大ロジャーはどんなに少なく見積もっても1,400頭の野生の象をしとめた。彼は、偉大なスポーツマンであるばかりでなく、疲れを知らない行政マンでもあった。かれは、ウヴァ州のほとんどの道路を計画し、建設したし、ほとんどのレストハウスを建設し、ウヴァ州の行政および軍用の建物を建設した (Wright: 815)。

コーヒー・ブームの激流のなかで、1841年広大な王の土地が活用されるようになった。1842～43年にも、眼を見張るような大きな土地販売があった。初期に開発されたコーヒー園には、サー・ウィリアム・ライトによるバデガマあるいはスプリング・バーのコーヒー園があった。また、バドラのドクター・ガーランドのコタゴダのコーヒー園のほか、ゴワラケレ、ナハヴィラ、ウェイヴェルヘナ、カナワレラ、ディクベデ、エタンピチャなどに多くのコーヒー園が開かれた。1845年の危機は、ウヴァ各地の土地の取り扱いが投機的であったことと深いかわりがあった。サー・エマーソン・ターネントはバヅラに2つのエステートを所有していたが、1万ポンドで購入したものが売値はたった350ポンドであったし、ヒンダガラエステートは1万ポンドが500ポンドになっていた。このクラッシュを境に、合理的な取引に導かれてプランテーション産業は、ウヴァにおいて大きく前進することになった。そして、エステートは国の最大の産業になったのである。

ウヴァの州都バヅラはまったく小さな町で、バヅラ・オヤ川によって3方を囲まれ、その川には、1867年バティカオラ・ロード建設にともなって鉄橋がかけられた。町は、魅力的な溪谷のなかに位置し、町の片側は高くそびえる山々がウヴァを、ヌアラエリア盆地から分断している（Wright: 852）。

1840年代から60年代にかけての時期、セイロンはコーヒーを主要な産業として、植民地経済分業に組み込まれていた。

4 節 道路・鉄道道路網

19世紀中頃コーヒー・プランターたちの期待が鉄道建設に向かわせた。コーヒー・エステート（農園）はキャンディやウヴァなど内陸部の標高が数百メートルの高原地帯に開発されており、コロomboやゴールなどの産品積み出し港への交通は道路交通に限られていた。たとえば、キャンディへのルートは1830年代に開発された115キロメートル、標高差488メートルのキャンディ・ロードを、牛車を使った輸送に頼っており、12日間をも費やす退屈な長旅であった。1847年頃79,000台の牛車がコーヒーをコロomboへ、コロomboからキャンディへは米などの消費物資を運搬していた（Royston: 91）。

鉄道

最初の鉄道はコロombo・キャンディ間を結ぶ中央線である。キャンディへの鉄道建設が議論され始めたのは1845年ごろであった。それまで、コロombo・キャンディロードの旅は決して容易なものではなかった。コーヒープランテーションが適地を求めて高原エリア、中央州に拡大していくと、プランターたちは鉄道輸送を望むようになったのである。しかし、政府からの財政的援助が得られないまま計画は実行に移されないまま時間がすぎ、コロombo・キャンディ間の鉄道敷設のための条例が通過したのは1856年であった。6つのルートについて調査され、着工されたのは1863年であった。工事には幾多の困難があった。モンスーン性の雨とともにやってくるマラリアやコレラ、洪水、地すべり、山崩れがあり工事は遅滞としていた。低地の湿地帯での堤防建設にはバラス補助のために松材を土台とする工法が開発され、急勾配の地域もあり、またトンネルは9本が掘られた。最長のトンネルは1,095フィートあった。建設に必要な機材や物資はイギリス本国から輸入された。マラリアによる死者も多発し、吊いの鐘が鳴りひびいていたほどで、建設労働者確保も困難であった。彼らのほとんどは南インドから連れてこられた人びとであった。

さまざまな困難を経て、第1部分は1865年10月に開業した。コロomboから34マイル（1マイル＝キロメートル）のアンベプサに蒸気機関車が入ってきたのである。それから1年の後ボルガウエラに達した。その後さらにマハウエリガンガ河やマヤオヤ河を跨ぐ鉄橋が完成し、1867年8月旅客および物品の輸送が始まった。最初に運ばれたものは鉄

道関係の物資であった (Royston: 91-92)。

5 節 娯楽を求めるプランター

プランテーション農業の担い手であったプランター (入植者) たちは主にイギリスからの移民であった。彼らの生活はジャングルや猛獣との戦いを含む厳しいものであったので、彼らが求めた娯楽の中心となったのは各地のクラブ組織であった。

セイロンのプランテーション産業を創出する最初の一步は、初代のガバナー・エドワード・バーズ (1824-31) の時期に、キャンディ周辺のヒル・カントリーにおいてコーヒープランテーションが開かれたことであった。最初に土地を得た人たちは1エーカーあたり5シリングで入手できた。後に1エーカーあたり1ポンドに高騰した。新しい地主たちは主にコロomboにいたパブリック・サーバント (公務員) であったが、彼らはまったく農業に関する知識を持っていなかったため、農業知識をもつアウトサイダーに依存することになった (Fernando: 63)。

ジョン・ウェザーストン著『ザ・パイオニア』(1986年)によれば、当時の産業にかかわる際困難が多く、もっとも安易、容易な部分は、イギリスから船で3ヶ月間旅することであったという。彼らは管理者として、給与が支給されることが約束されていたのである。だから、彼らはコーヒーに関する知識を何も持ち合わせていなかった (Fernando: 63)。

他方、プランターたちは、ジャングルにキャンプ地に適した場所を見つけて、自分自身とその小さな集団の男たちのために臨時の、仮設の宿舎を設置してから、土地の整備の仕事を開始したのである (Fernando: 63)。プランターが必要としたものは、初期においてはわずかなものであった。たとえば、ナイフ、斧、入植エリアをマークするための裏打ちのあるロープ、キャンドル、マッチ、そしてショットガンのようなものであった。それらはまた、野生の動物から身を守る役割を持っていた (Fernando: 65)。

初期のプランターの多くはスコットランド人であった。そして、しばしば近隣の村や同地域から一緒にやって来た人たちであった。コーヒー入植が拡大するにしたがって、家や家族、友人たちへの新鮮な機会に関するニュースが伝わっていた。次に示すのは、ジェームス・テラーがどのようにセイロンにやって来たかについてである。1851年、17歳のとき、彼は監督官助手の約定にサインした。テラーはコーヒープランターとしてセイロンにやって来た。その後41年間セイロンに滞在し、1892年に死去するまでセイロンに暮らした。ヘワハタ地域で茶栽培をおこなった。この合計3,290エーカーで、テラーはその人生のほとんどをすごしたのである。

これら初期のプランターの建てたバンガローは建築学的な原理などまったく考慮されたものではなく、荷造り用のケースを使用して建てられたものであった。それらは、1日のほとんどの時間にわたって薄暗かったし、生活条件は優れていたわけではなかった。

後にコーヒープランターになったジョン・ケーパーは、1840年に最初のパイオニアたちのシェルターを見て次のように表現している。「みすぼらしいキャビンは20フィートの長さもなく、6フィートの広さ、壁の高さも、その程度であった。プランターの住居はバンガローと呼ばれていた」(Fernando: 65)。

ほとんどの住居、つまりバンガローには衛生的な施設さえ存在していなかった。プランターの最大の問題は一人ぼっちの寂しさであった。男たちの多くは犬やそのほかのペットを相棒として飼育していた。ハリー・ウィリアムスという茶プランターはヤモリを訓練して、手なづけて、食事を分けあっていた (Fernando: 68)。

プランターたちの社会的接触のためにいくつかあったクラブは、入植地域に設置された。クラブの開催日は毎日曜日であったが、この日には文明的なところから何マイルも離れて生活している寂しい男たちにとって重大なイベントとなっていた。彼らは、あらそってクラブハウス建設して、あるものは徒歩で、あるものは馬の背に揺られて、何マイルもの道のりを旅して、ときには夜を徹して集まってきた。この日はスポーツ活動で1日を過ごした。いくつかのクラブはクリケットやゴルフの施設を持ち、ほとんどのクラブはテニスコートを持っていた。ビリヤードやクリケットは最も人気のあるスポーツであった。女性たちはもっぱらカードゲームで時間をつぶした。バーには、多くの鳥ものが貯蔵されていた。飲酒は昼間から始まり、翌朝まで、小さな小部屋で続いた。そこでは、歌い、踊り、語り合い、笑った。しかし、誰もが翌日にはそれぞれ自分のエステートへ戻っていった。新聞は開拓地には届かなかつたし、映画も知られていなかった、またラジオはまだ発展していなかった。プランターは時に町に出て、レクリエーション施設のあるところで時間を過ごした。彼らは夜明け前に朝食をとり、ランチをポケットに突っ込んで徒歩で自分の領地内を移動しながら食べた。夜は、夕食のために、餓えた狼のような状態で夜遅く家に戻った (Fernando: 70)。

こうしたプランターたちのクラブとしての役割を果たしたコロンボのゴール・フェイス・ホテルやキャンディのクイーンホテル、バンダラワラホテルのような古いホテルは、最近に至るまで安定して続いてきた (Fernando: 70)。

このようなプランターたちとは対照的なのが、管理管助手でカレッジ教育を受けた若者たちであり、しばしばスポーツ・フィールドで評判となるようなこともあった。大学の絆や家族的背景があった。かれらはモーターバイクや若いときから新しい仕事と結びついていた。彼らのための十分な家具が揃っていて、ペンキ塗りたてバンガローは快適であった。現代的居住のすべてのアメニティが整った生活であった。バンガローの状況は1830年代中頃から発展した (Fernando: 71)。

6節 コーヒープランテーション段階の観光

イギリスやヨーロッパからのプランターたちの生産経済活動はこの時期、シナモンやココナッツ、コーヒー生産に集中しており、その活動範囲も限界があった。それにともなって、本国からの国際観光客誘致の範囲も限定的であった。すなわちヨーロッパ人プランターが生産活動をおこない、居住生活する良好な環境が形成された範囲が本国からの観光客誘致の地域になっていたのである。ここでは、この範囲について論ずることにする。われわれの手にある1868年発行の観光ガイドブック『Souvenirs of Ceylon(セイロンの記念品)』にそって当時どのようなセイロン観光が提案されていたのか、どのような観光経験が提案されていたのかに注目することにしよう。

このガイドブックは60数ページにわたる120枚のイラストと、旅行の紀行文によって構成されたものである。イラストは、写真から起こされたもので、その内容はこの本の分類にしたがって枚数を示してみると、主要都市20枚、古代都市4枚、巨大タンク1枚、仏教信仰4枚、悪魔信仰2枚、象狩り2枚、エルク狩り1枚、コーヒー産業2枚、セイロン鉄道15枚、山岳風景1枚、河川風景10枚、特有の植物5枚、住宅5枚、原住民23枚、変人たち26枚、合計121枚である。

このガイドブックに掲載されたイラストレーションは、旅行先としてどんな地域があるか、どのような体験ができるか、見るべきものは何かを示しているといえる。まず、どこを訪れるのかという点に着目し、次に何を見、何を体験するかについて検討することにする。

(1) 訪問すべき地域

イラスト集に収められた分類からすると、主要都市として挙げられているのはゴール、コロombo、トリンコマリ、キャンデイ、ヌワラエリア、バデューラであり、すでに荒れ果てた古都としてはアヌダープラ、ポロンナルアが紹介されている。主要都市とはイギリス人プランターが、コーヒーをはじめシナモン、ココヤシなどの生産、流通という経済活動をおこなっている都市であり、彼らが居住、生活し、あるいは娯楽やレジャーを楽しんでいる中心的な場所であった。

このほかイラストの原版となった写真が撮影された場所についてみていくと、このガイドブックが観光客を導こうとしている地域や場所がさらに明確になるだろう。セイロン鉄道や河川風景、コーヒー産業などに分類されたイラストがどこで撮影された写真であるかについて整理してみよう。121枚のイラストのうち原住民、変人たちと分類された人物像48枚以外は風景写真であるので、これらの撮影場所を特定する。

もっとも多く撮影地はキャンデイおよびバラデニアを含むその周辺で16枚、次がコロomboおよびその周辺の14枚、以下ゴールの6枚、トリンコメリとアヌダープラ4枚、ヌアラエリア3枚であった。このほか地名は特定できないものなかには、鉄道用

の鉄橋やトンネル、切通しなどが多数あり、これはキャンディへの新たな移動手段である、開通したばかりの鉄道に沿って撮影されたものであった。

各都市に加えて、1856年に開通したコロomboとキャンディを結ぶ鉄道はコーヒー運送ばかりでなく観光者にとっても訪れるべきルートを決する要因となっていた。このガイドブックが発行された1868年は、コロombo—キャンディ間の鉄道が開業した1867年8月から間もない時期であり、観光の目玉は間違いなく鉄道そのものであったに違いない。短距離とはいえ標高差は488メートル、敷設困難な湿地帯やトンネル、切通しを必要とする山岳地帯、鉄橋架橋が必要な河川などを越えて完成した変化に富む鉄道の旅が最大の目的であったということができよう。

(2) 何を見、何が体験できるか

トリンコメリやヌワラエリアで、観光客は何を体験するのであろうか。キャンディのような古都ではなくエキゾチックな文化や歴史があるわけでもなく、眼を見張るコーヒープランテーション産業が育っているわけでもなかった。ここは、プランターにとっても観光者にとっても休息の地、レジャーの地であった。何よりもハンティングやフィッシングのメッカであった。

ヌワラエリア

ヌワラエリアは現在は美しい高原リゾート都市で、美しいゴルフコース、競馬場、伝統あるホテルがその雰囲気を出している。南国スリランカとは思えない涼やかな高原都市であり、ここにたどり着くまでの山岳道路周辺は見渡す限りの茶畑と高原野菜の畑とが連なり、「耕して天に届く」景色が続いている。しかし、1860年代当時のヌワラエリアはまだ、茶栽培は始まっておらず、かといってこの高原までコーヒー園は開発されているわけではなかった。また、鉄道が開通するのも茶栽培が本格化する1876年を待たなければならない。1860年代当時のヌワラエリアは何よりも高原リゾート都市としての発展が始まったところであった。

イギリス人のヌワラエリア発見は1824年、時の総督が、ゲリラ活動で抵抗していた反イギリス勢力を追って兵士とともにやってきたのがきっかけであった。この周辺は野生動物の宝庫であり、提督はじめ兵士、さらにプランターたちは象狩りやヘラジカ、豹などの狩りやフィッシングに熱中することになった。彼らは、ハンティングを楽しむために、バンガローと呼ばれる小屋を設営した。なかでももっとも立派なバンガローは提督が建てたもので、現在のグランド・ホテルである。

トリンコメリ

東海岸に位置するトリンコメリもまた、産業都市というよりはレジャー都市としての

風貌をもっていた。

この時期の観光地は、イギリス人たちの経済活動およびレジャー活動の拠点となっていた都市や地域であった。本国からの植民者たちにとって良好な生活空間が、ヨーロッパからの観光客にとっても安心、安全、快適な旅行目的地になっていたことが確認されよう。

第3章 茶プランテーション段階

コーヒーが主要産品としての地位を失っていく一方で、茶栽培に代表されるプランテーション産業が登場し、全島に植民者たちの活動範囲が拡大するとともに、植民地政府の力が及ぶことになっていった。本節では茶栽培などの経済活動が全島に広がったこと、それにもなってプランターたちの安全、安心、快適な生活空間が全島に拡大した状況について整理し、次に本国やヨーロッパ各国からの国際観光の目的地が全島に展開したことを示したい。

1 節 コーヒー代替産業の模索

1840年代のコーヒーの不振および1950年代の回復以降の時期において、他の産業、他の作物への転換あるいは導入がおこなわれた。主要なものとしては茶のほかココナツ、シンチョナ、ゴムなどが新たな作物として導入された。

(1) 茶産業着目の背景

茶はセイロンの主要産品になっていくが、セイロンの茶が注目されるに至る過程およびその背景について若干振り返っておくことにしよう。

イギリスに定着した紅茶

イギリスに茶が紹介されたのは1630年代中頃、当時ヨーロッパ世界経済のヘゲモニー国であり、中国や日本から茶をヨーロッパに持ち込んでいたオランダをとおしてであった。そして、イギリスで茶が一般に市販されたのは1657年で、トーマス・ギャラウェイというロンドンのコーヒーハウス店主が、店で飲ませたのが最初であった。値段も高価で重さ1ポンドあたり61~10ポンドで、買ったのは上流階級の人びとであった。その後、茶はコーヒーハウスからしだいに家庭のなかに入ってゆき、17世紀末ころには上流階級の家庭の飲み物として普及した。とくに女性の飲み物となることによって広く普及していった(角山:33-39)。1660~1760年の期間におけるアジアとの貿易関係を見ると、アジアからの輸入額の最大を占めていたのはインドのキャラコをはじめとする繊維製品で

18世紀はじめまで、全輸入額のほぼ70%を占めていた。キャラコ輸入禁止法を契機に、18世紀はじめから急速に増大するのが中国からの茶の輸入で、1760年には総輸入額の約40%、数量にして約620万ポンドを占めていた（角山：47）。

17、8世紀における中国とヨーロッパの貿易は基本的には奢侈品の交換であった。中国の絹、茶、陶磁器などが、金、銀、時計と交換されていた。イギリス東インド会社は、インド・キャラコの輸入禁止以降、東洋からの輸入品の主力を中国茶に移した。この貿易に関してヨーロッパ側には2つの問題があった。すなわちひとつは銀の流出であり、いまひとつは茶の密輸問題であった。この問題を解決するためにイギリス・インド・中国間の三角貿易、すなわちインド産のアヘンを中国に送り、中国の茶をヨーロッパへ送る、インドへはイギリスの工業製品を売るというものである。19世紀にはいるや中国へのアヘン輸出は急増し、1767年には1000箱、1820年には4000箱、20年代には19,000箱、アヘン戦争直前の1832年には4万箱、ピークとなった1880年には10万箱に増加していた。

1840～50年代において、中国からの茶の輸出は自由貿易の波に乗って、未曾有の活況を呈した。自由貿易主義のなかで、1600年以来アジア方面の貿易に関して与えられてきた東インド会社の特権が廃止され、中国貿易は自由化された。これにより、リヴァプール、ブリストル、グラスゴーなどのイギリスの地方港から一攫千金を夢見た帆船がいつせいに中国に向けて出発した。それ以後、一番茶を運んだ早い船の船員にはプレミアムをつけるという慣わしが生まれ、1840年代の後半中国通いの快速船の建造が始まった。イギリスのクリッパー時代が始まった。

この時期イギリスの茶貿易に大きな変化が発生した。すなわち、1849年の「航海条例」の廃止と、強力なアメリカのクリッパー船がライバルとして登場してきたのである。1850年アメリカのクリッパー船オリエンタル号が香港から95日間という記録的なスピードでロンドンに到着した。1850～60年代はクリッパー船によるティ・レースの最盛期であった。1860年代になると南北戦争勃発のために脱落し、ついで1869年にはスエズ運河が開通してイギリスへの距離は一挙に500海里も短縮されたことによって、ティ・レースも幕を閉じることになった。さらに、1860年代からインド産の茶の登場が世界の茶貿易の構造を変えることになった。

インド茶の登場

1823年、野生の茶がインドのアッサムの奥地で発見された。これは茶樹の知識がなかった東インド会社の植物係官に無視され、日の目を見ることはなかった。ついで、1831年アッサム州地方長官チャールトンもアッサムで茶樹を発見し、現地人はその乾燥した葉を煮出して飲用に供しているという手紙を添えて、カルカッタの農業園芸協会に送った。このときも植物専門家によって茶樹とは公式に認定されなかった（角山：118）。1837年12月、野生のアッサム種の葉を原料として、中国人の手によって中国製法で

作られた緑茶が完成し、1838年11月ロンドンへアッサム茶の見本が到着した。これが、ロンドンの業者の間でも講評を博し、ここからインド茶の生産、製造が始まった（角山：122）。

スリランカにおいてコーヒーに次ぐ生産物を探すなかで注目されたのはココナッツ、シンチョナ、ゴム、そして茶が登場したのである。シンチョナは、マラリアの治療剤として知られるキニーネの原料となるアルカロイドをキナの樹皮から採取するもので、大きな需要が発生していた。キニーネやキナはオランダ語語源の単語であるが、キナを英語でシンチョナと称する。

（2）各州の状況—都市・産業

茶プランテーション段階になると、イギリスの支配と白人による経済活動はスリランカ全土に及ぶことになった。ここでは、9つの州のうちいくつかについてそれぞれ概観する。まずコーヒー段階から開発の進んでいた4州からはじめよう。

ここでは、『20世紀のセイロン』に沿って、各州別に茶産業台頭時期、すなわち1900年ごろの状況を整理する（Wright）。

南州（Southan Province）

南州は海岸の州で、主要な港であるゴールをもち、重要なプランテーション産業を有する広範囲の地域である。しかし、商業的利益の発展は、西州の海岸地域より速度が高いというわけではない。事実、総収入基準による判断を見ると、南州は過去数年のあいだに後退している。

1905年の政府による土地販売は長年のあいだで最大で、この年には2,162ロット販売された。このブームはしばらく続いている。南州はたぶん新たな産業のもっとも繁栄するセンターのひとつになるであろう（Wright: 751）。

黒鉛産業は発展中の産業である。ゴールの町ばかりでなく、道路沿いにもさまざまなステーションにおいても、輸出するために黒鉛をパックし、貯蔵する小屋や店が見受けられる。黒鉛は採取され、蓄えられ、かばんやバリエにパックされるが、その作業を行う男や女、そして子供たちの長い列が見られる。彼らの顔、腕、身体は黒鉛の粉でコーティングされ、太陽の光で輝いて見える。そのほかの産業としては、ココヤシの皮繊維がある。海岸沿いの村では1日中、女性たちが皮をたたき音が聞こえる。また、すべての道路の沿道には男や女、子供たちがココヤシ皮を洗浄して、取り出した繊維を糸に編み上げる作業をしているのが見られる。繊維は編んで丈夫な縄状にして船舶関係で使われるのである。この大部分は船底にたまった水をくみ出すための大きな手桶として

輸出されている。漁業も、海岸地域全域の男や青年たちを十分に雇用している。アラック酒生産もまた、重要な産業である。ゴール・ディストリクトには33社の蒸留酒製造所があり、マータラ・ディストリクトには5軒がある。1905年のアラック酒の生産量は114,214ガロンであり、他のディストリクトでも81,461ガロンを生産した。アラック酒産業には、1,320人の男が雇用されていた (Wright: 751)。

南州は3ディストリクトから成っている。すなわち、ゴール、マータラ、ハンバントタの3ディストリクトである (Wright: 752-753)。

ゴール・ディストリクトは3つのうち最大で、6525平方マイル、人口は1905年1月1日現在で、607,602人である。ここの収入は主として農業であるが、工業も拡大が目指されている。また、海の漁業は長い海岸線に沿った地域でおこなわれていて、漁業はその重要性を増しつつある。なぜなら、鉄道が開通して遠方の市場がゴールの漁民たちに開かれたからである。

マータラ・ディストリクトでは、農業収入が最も重要である。人口の2分の1の人びと(213,840人)が、農業に従事している。4万エーカーで稲作がおこなわれ、2万エーカーでシトロネラ油の原料となる芳香を放つ植物シトロネラが栽培されている。ウェリガム・コレラはシトロネラ油産業の中心で、この地域に276社以上が立地している。海の漁業はゴール・ディストリクトと同様、多くの人びとに従事している。

ハンバントタ・ディストリクトは、1,013平方マイル、人口は1905年現在111,107人に過ぎない。農業はキナ栽培は致命的な形式になっている。

農業企業の歩みはゆっくりと進展している。主に、ココナッツ、シトロネラ、稲作がある。25,000エーカーでココナッツ、ピンロウナッツ、そのほか果実のなる木が栽培されている。シトロネラ産業は繁栄している。この地域には160社の蒸留酒製造所があって、多数の人びとを雇用している。海岸で精製される食塩は原始的な方法で収集されている。

ゴールは、最初ポルトガル人が、次にオランダ人がそれ以前の外来者を追い出し、150年間にわたって支配した。ゴールの現在の町は2つの部分から成っている。ひとつはフォートとして知られるポルトガル時代から350年以上続いてきた古い要塞内にできた町である。もうひとつは郊外に位置する現地人居住地域である。

中央州 (Central Province)

コーヒーの失敗と茶栽培の完全な成功とのあいだに、実験的にシンチョナ栽培がおこなわれた。シンチョナ栽培の歴史は農業生産の歴史ともいえる。なぜなら、シンチョナはかよい植物で、湿気が多いと立ち枯れしてしまうことがよくあった。1887年、シンチョナ生産高は1,500万ポンドに達した。

中央州のヒル・ディストリクトは狩猟に適した地域であり、健康のためのリゾート地

である。セイロン政府鉄道は島のはじからはじまで、来訪者を送り届けることを意図している。来訪者たちはほんの数時間の快適で、豪華でさえある鉄道の旅をすれば、この島の心臓部へ入り込むことができるのである。鉄道の旅は世界的に見てももっとも面白いことのひとつである。人びとはコロomboのパームヤシの林をぬけ、熱帯の中心部から、典型的なイギリスの花が育てられていて、まったくイギリスの夏といった気候のカントリー地域へ達するのである。山々や谷間、茶畑や森に覆われた丘陵、曲がりくねり銀色に光る川、急落下する滝などの連続した愉快的なパノラマが見られる。高原を走る鉄道からはハウシダやそのほかのシダ類のソフトなマントに覆われている興味深い風景が見られる。それらのシダ類はイギリスにおいては普通、温室で注意深く世話されているものである。この美しい土地には、人びとの目をひきつけるものの多くの中心がある。特に、ヌアラエリア周辺は誇りであり、セイロン島最大のサナトリウムである。本世紀初期、本ディストリクトは、ただウヴァの現地の村人たちだけに知られているだけであった。人びとはそこを、リゾート地として、あるいは宝石や鉄鉱を求めたのであった。1810年、何人かのヨーロッパ人が狩猟目的でやってきたが、彼らは風景の美しさ、および素晴らしい気候に衝撃を受けた。そして、1828年の興味深い報告によって、軍の駐留地と部隊のサナトリウムが現在の町の一部分に設置されることになった。1833年、ヌアラエリア・ディストリクトの行政の中心がこの場所への設置を許可したのである。バンガローが造られ、商店が開業し、人びとのリゾートのために必要なすべての付属物が一つ一つ整っていった。現在は、何軒かのファースト・クラスのホテルは自慢できるし、全島で唯一のヨーロッパ人居住者のための学校、美しい英国教会やその他の礼拝の場所、いくつかのクラブ、ゴルフ場、競馬、テニス、クリケットそしてホッケーのためのグラウンド、賭博場や図書館ができた。美しい湖の端にはクイーンズ・コテージがある。これは、行政官の夏のレジデンスである。美しい遠足コースがたくさんあり、来訪者のために開かれている。もし登山家なら、ファルス・ベドロ山に登り、セイロン最高地の公園ピデュルタラガラにも近い。もし活動的でも野心的でもない人なら、銀色に輝く森の美しさを驚きをもって眺めることができる。標高7千フィートのランボダパスヘドライブし、比べようもないような美しさに眼が釘付けになるだろう。また、谷間への早朝の遠足としては、ハクガラ植物園がある。それは、標高5,600フィートにバデュラ道路でヌアラエリアから約6.25マイルの美しい場所に位置している。植物園内の優れたポイントからの眺めは、セイロンでもっとも雄大である。ハプタラ、ナムヌクラ、そしてマデュルシマまでの眺めが広がっているのである。植物園の裏には、園より高い場所にハガラ・ロック（標高1,300フィート）がある。全体的に見ると、ヌアラエリアのように興味深い場所で、容易にたどり着ける場所はとても少ない。

中央州はキャンディー、ヌワラエリア、マータラの3ディストリクトに分かれている。キャンディーの町は人口の多い唯一の中心地である。比較的大きな町としては、人

口3,791人のガンボラ, 人口3,454人のヌアラエリア, 人口2,341人のハットンとディコヤがあり, これらはそれぞれの土地の地方委員会が行政にあたっている。ヌアラエリアにおける出来事は, 改良委員会が処理しており, マータラは地方委員会が処理している。(Wright: 804-805)

このほかコーヒー段階から開発が進んでいたのは西州とウヴァ州とがあるが, これらはすでに紹介した。つぎにコーヒー産業段階の後, 19世紀後半に開発が進んだ州の状況について整理しよう。

中央北州 (North-Central Province)

中央北州は9つの州のうちで人口は最小で, 西北ディストリクト, 北ディストリクト, 西南ディストリクトの公園地帯はいずれも森に覆われていて, 居住する人がほとんどいないのである。州の南部はセイロンの巨大中央山岳地帯である。そこには標高2,536フィートのリティガラ山がある。

約7万人の居住者はシンハラ人で, それもキャンディ・シンハラである。すべてキャンディ王国に従っていた人びとで, だれもが農耕民もしくは土地所有者である。鍛冶屋, 金細工師, 陶工, 洗濯屋, もしくはトムトム太鼓打ちでもある。しかし, 生活に必要な工芸による者は少なく, たった2種類のカーストがあるだけである。キャンディ・シンハラ人はかつては, すべてのものを耕作していたし, 作っていた。しかし, 生産に関連する小売商売や取引は低地シンハラ人, タミール人, ムスリム人などの植民者の手中にあった。

歴史的にみると, 興味深い州であり, 初期のシンハラ文化や権力の偉大なる中心地であったのである。アヌダーラプラ遺跡, ポロンナルアの寺院, 古代ミヒンタレなどがあるが, これらの地は現在では広大なジャングルのまっただなかにある。

タンク=人造貯水池の現代的な歴史は1832年に始まる。それは, 公式に調査が始まった年である。ターナーはこのことについて次のように記述している。タンクは, セイロン島における人びとの労働力を使用した, 途方もなく巨大な記念碑である。この州の東南に位置するミネリヤ湖は, 最も魅力的なタンクである。

行政代理人による, 州の一般的状況に関する最近の行政報告。アヌダーラプラの町を除いて, すべての町は主な道路に沿って位置している。そこには, タミール人, 低地シンハラ人とムスリム人が混住している。この州では農業人口は「村」と呼ばれる小さなコミュニティーに集住しており, それぞれの村が「タンク」を持ち, それぞれは互いに広大な森やジャングルによって隔離されている。これらのコミュニティーは原始的で, 排他的であり, 100年以上昔からの古い習慣や理念がまだはびこっており, 村は村人の世界なのである。村の数は1,100あまりで, 人口は平均して各村75人程度である。30年

余り前の村とタンクの関係は現在よりさらに特別に密接であった。ほとんどの村には、多すぎるほどの食料の備蓄がある。人びとは多くの家畜を飼育しているが、それらを生活のために活用するのはほんのわずかである。バッファローのほとんどの頭数は耕作用に使われ、黒牛のうちわずかな頭数がコロomboや高原地域に売られていくだけである。

州の更なる大きな発展は、原始的で保守的な人びとに期待されることはないだろう。彼らはすべてが満たされることを単純に期待しているだけであり、エネルギーに進歩的ではない。永久に変わらないような耕作がなされている75,000エーカー以上の土地は採算が取れてはいない。200万エーカーの森やジャングルはまだ、開墾されていない。

ヨーロッパ主導のプランテーション産業に組み込まれていない、現地人による伝統的な生活が守られている地域である (Wright: 776-778)。

東州 (Eastern Province)

この州の主要な道路は、バデュラからバティコアへ通じる道路、アヌダーラプラ、ダンブラーからトリコメリに向かう道路がある。コロomboから州都バティカロアを訪れようとする人は、2つの方法がある。ひとつは、コロomboからバンダラワレへの長旅の後、デュリーデー道路を何マイルもの車の旅をしてくる方法である。もうひとつは、3日間の船旅である。

東州の特徴はなんと言っても、広大な海岸沿いに位置していることである。行政的には2つのディストリクト、すなわちバティコア郡とトリコメリ郡とである。カルムライ (Kalmurai) から14マイル離れたアカライ・プット (Akkarai Puttu) のカルンコディティヴ (Karunkoddittive) に向かう、南海岸に沿った道路とサカマン・タンク (Sakaman Tank) へのドライブは評価されている。道路の東側はココナツ園や大きなエステートが立地する人口が密集している村がある。他方、道路の西側はほとんど眼が届く限り、水田が広がっている。

東州はスポーツマンのパラダイスである。あらゆる種類のゲームがほとんどどこでもできるのである。1901年の公式報告には次のようにある。「ゲームはかつてと同じように、象、バッファロー、インド大鹿、まだら鹿や赤鹿、それに孔雀がこの州のジャングルのいたるところでお目にかかることができる。渡り鳥の数は減少しているようには見えない。熊やレオパードの数も多く、ある若きスポーツマンは一晚に、小池において4頭のレオパードを捕らえた。

北州 (Northern Province)

北州の行政代理人による最近の行政報告には次のようにある。ジャフナの原住民社会は大きく変化しつつある。ローキャスト (Lowcastes) と呼ばれる地域では、より豊かさを増し、財産を所有するようになり、ほとんどの者たちは自然と旧来の習慣を放棄し

つつある。

行政代理人による他の報告によれば、マンナー（Mannar）ディストリクトの村人たちは、外部から持ち込まれた食べ物については何も知らなかった。このディストリクトにおいて、快適の基準が向上していることはいまや知られており、真価が認められている。ムーア人たちは商業的な旅人（行商人）であり、ビスケット、コンデンス・ミルク、炭酸水を、米、煙草、唐辛子とを交換している。

上記のような食品の供給に加えて、煙草栽培は当州における、もっとも高いランクに位置づけられ、もっとも重要な収益源となっている。セイロンに住むヨーロッパ人居住者たちのあいだでは「ジャフナ・シガー」と呼ばれている。しかし、オランダ支配時期およびイギリス支配初期において、地方的に育った煙草で、25%の税にもかかわらず、良好なマーケットを持っていた。1798年の公文書によれば、「煙草は昨年30リスクドラー購入され、砂糖菓子はナゴレ（Nagore）において商人によって50%の利益を上乗せして売られていた」。ジャフナの煙草はインドから発して、近年インドによって衰退していった。1902年、ジャフナ・シガーをヨーロッパ市場に適したものに仕上げようと試みたが、それは推奨するような結果をもたらすことはなかった。もし、適切な方法がとられるなら、セイロン煙草には偉大な将来があると考えられていた。そして、資本とエネルギーの総合の要求は、企業へ持ち込まれることになった。

北州は3つのディストリクトに分けられている。すなわち、ジャフナ・ディストリクト、ムラティバ・ディストリクト、マンナー・ディストリクトである。

オランダ人はマルチヴァにフォートを設置し、町を発見した。そして、これが1796年オランダの統治に代わってイギリス行政のヘッド・クォーターになった。

1806年バニ（Vanni）はジャフナから分離され、マルチヴァが州都になった。バニ郡は、人口が増加し、ここへの関心も漁業から離れ、農業に向かった。この地域はほとんどジャングルに覆われている。道路に沿って旅すると、道のほとんどの部分はジャングルを通過している。ジャフナへの主要道路に沿った場所では、道路の両側のジャングルは切り開かれている。

マンナー・ディストリクトは、狭い海峡でつながっているマンナー島を含む400平方マイルである。ここの歴史は興味深い。ポルトガル人はマンナーへの入植に努力した。1658年オランダはポルトガルからこの島を獲得し、さらに1795～96年にはイギリスの支配下にはいった。このディストリクトは3行政区に分かれている。すなわち、マンナー島、マンタイ、ムサリである。そこには、いくつかの井戸があり、実験的なココナッツ園がある。また、牡蠣の貝殻を捨てる場所がいたるところにある。1艘分の積荷分がイギリスに輸出されたが、このヴェンチャー・ビジネスは繰り返されることはなかった。ペルシア湾の牡蠣は、セイロン北州の牡蠣に比べ、比較的大きく、厚く、良港でボタンに適していた。また、石灰を作るために移動させるほどの価値をもっていなかった。

マンナーはセイロン鉄道システムとインドの鉄道とを結合するという事業計画と結びついていた (Wright: 782-785)。

サバラガムラ州 (Sabaragamuwa Province)

サバラガムラ州は、一方では西北州および西州、南州と、そして他の側はウヴァ州および中央州とに挟まれており、公的な重要さでは9つの州のうち最下位だし、広さでは8番目、人口は第6位、税収は第7位である。

この州では、宝石が川や小川、それに谷の泥炭層の中か発見される。宝石産業のほとんどはムスリム人の手中にある。ダイヤモンドのほか、ルビー、サファイヤが産する主な宝石である。行政府代理人G.S.サクソンによる1905年行政報告における鉱業に関するレポートには次のように述べられている。「鉱業のほか、本州は、プランテーション産業のための原野としてさらに重要である。このプランテーションは、空間が続いている。1905~06年に開かれた土地は、ラクワナの1,223エーカー、バラゴダの380エーカー、ラプナプラおよびペルマドラの66,103~7,640エーカーで、いずれも茶栽培のために開かれた。ラクワナは555エーカー、バラゴダは110エーカー、ラトナプラは2,361~3,026エーカーであった。

ラプナプラは本州の州都であり、約4,000人が居住する町で、カルガンガ川の両岸に開けた絵のように美しく、よく開発されたところである。町の中心部の魅惑的な旧いタンク、行政のヘッド・クォーター、バザール、幾軒かのかわいらしいバンガロー、まるで公園のような町である。

ケガラ・ディストリクトは、642平方マイルで、人口188,791人である。その約半数はシンハラ人で、農業に従事し、主に稲作、キナ、ココナッツ、プランタン・バナナ、そしてピンロウの実を栽培している。ラトナプラ・ディストリクトと同様に、ケガラ・ディストリクトの鉱業は重要な産業である。ここには34の黒鉛鉱山の地域があり、そのほとんどは低地シンハラ人の経営である。黒鉛産業で働くクーリーはほとんど低地から来た人たちである (Wright: 792)。

2節 20世紀初期スリランカにおける国際観光

茶生産や他のプランテーション産業によって、イギリス経済に従属する段階に至ったスリランカは、全島が観光旅行の目的地となった。20世紀初期のセイロン観光ガイドブックに従って、当時の旅行の状況を整理しよう。

(1) 鉄道旅行

ここでは、当時開通した鉄道による旅行に注目して1910年発行のヘンリー・ゲイブ著

のガイドブック『セイロン鉄道に沿って』の中から、コロンボ・ゴール間の海岸線沿線の情報について紹介する。

コロンボからマータラへの海岸沿いの鉄道は、シンハラ人の生活を知るうえではセイロンのどこよりも都合の良い南海岸の村や町を訪ねることができる。この路線は、コロンボの中心マラダナ・ジャンクションを出発し、市内および郊外の駅、すなわちペター駅、フォート駅、スレイブ島駅、コラピティヤ駅、ウェラワッタ駅、デヒワラ駅を通過する。

ペター駅周辺は、コロンボ市内でももっとも人口稠密地域で、現地商人たちが集住している。フォート駅は、郊外やさらに南部の村や町に住む多くのヨーロッパ商社社員やフォート勤めの政府官僚たちが利用する駅である。また、グランド・オリエント・ホテルやビストロ・ホテルの宿泊客たちがマウント・ラヴェニアへの旅やさらに南方の各地へ旅行するときにもっとも便利な駅である (Cave: 32)。スレイブ島駅は、ゴールフェイスの終点に位置し、ゴールフェイス・ホテルの客にとっては最も便利な駅である。コラピティヤ駅は、グリーンパス、タレット・ロードが合流してゴール・ロードにつながる場所にあり、ピクトリア公園やシナモン・ガーデン周辺に住む人びとにとって便利な駅でもある。バンバラピティヤ駅は、人びとの住む地域ではあるが密度は低く、周辺には大きく豪華なバンガローがある。デヒワラ駅は、素晴らしいバンガローが続く地域で、古い漁村の風景も残っていて毎日のように魚市がたつ。仏教寺院もある (Cave: 36)。以上がコロンボ市内および郊外区に属する駅である。

マウント・ラヴェニア駅の名前は、1824年セイロン総督サー・エドワード・バーンズが建てた美しい海の官邸に由来している。現在のマウント・ラヴェニア・ホテルである。海水浴、釣り、テニスやビリヤードなどのレクリエーションが何でもでき、ロマンティックで絵のような美しさである。この村の人口は約5千人。荷物運搬用のレンタル馬はないが、牛車がありヨーロッパ人は1マイル50セント、現地人なら25セントである。産物としてはココナッツ、シナモンや野菜がある。この駅から運び出される物は魚のみである。レース、竹編み細工、牛車の車、骨董品、彫刻した家具はみなガルキッサ村の製品である (Cave: 39)。

アングラナ駅は、人口約千人の村で、主な農業産物としてはココナッツ、キンマ、シナモンがある。

ルワナ駅：ルワナは人口約1,800人で、ほとんどシンハラ人である。ココナッツが主な産物、家具の手工業、大工仕事もある。男子のためのプリンス・オブ・ウェールズ・カレッジはここにある。旅行客のためには駅付近にレスト・ハウスがあり、牛車がある。

モラトゥア駅：人口約3万人、絵のように美しい町のなかにあり、一般的な待合室に加えて、女性用待合室がある。駅付近のレライアンス・ホテルにはダブル・ルーム7部

屋があり、食事もできる。荷物運搬用の馬、牛車が駅近くにある。主な農産物にはココナッツ、シナモン、キンマがある。良質のアラック酒が醸造され、鉄道で毎年250トンが運び出されている。家具工業があり馬車、茶箱、レース、などを生産している。茶箱は月平均約60トンが鉄道で送り出している (Cave: 40)。駅近くで開かれるバザールが注目される。ほかに、パナドゥア川に架かる橋、現地人たちが水上交通のために使う竹筏、ゴール・コロombo道路のルナワラ方面へのドライブなども楽しみであるし、家具工房の見学や美しい湖も面白い。また、ラグーンやラグーン・ピクニックに関しても多くの写真とともに紹介されている (Cave: 42)。さらに、モラティヴァはシナモン栽培の地域であった。空気は湿気を運び、降雨の多い、土は砂地で乾きやすい環境がシナモン栽培に適していた。本書では3ページにわたってシナモンの木や栽培方法、さらにピラー（皮むき業者）と呼ばれる労働者についても説明している (Cave: 44-46)。

パナドゥラ駅：パナドゥラは人口約2千人の町で、モラトゥヴァと様子はあまり変わらない。駅は町の中心部に位置し、有用な待合室があり、ステーション・ビュー・ホテルと呼ばれるホテルもある。また0.5マイル離れたところにはレスト・ハウスもある。主な農産物はココナッツ、シナモン、茶、ゴム、米、キンマ、胡椒などである。手工業には茶箱、真鍮や銀の細工、ココヤシ皮繊維のロープやマット、農機具、家具などの製作がある。ここは古戦場でもある。週末になるとコロomboから狩りを楽しむグループがやってくる (Cave: 47-48)。

ウッドゥラ駅：3000人程度の村である。銀、金宝石産業がある。観光客のための特別なアトラクションや宿泊施設はない (Cave: 48)。

カルタラ北駅・南駅：カルタラには南北2つの駅があり、それぞれは河と橋の近くに位置している。カルガンガ川は約50マイル上流の宝石の町ラトナプラとカルタラを結ぶ現地人の交易の川となっており、観光客も船旅を楽しむことができる。そのほかアトラクションも多い。2階建ての新しいレスト・ハウスは海や海岸の遊歩地に面していて、6部屋のベッドルームがあり、観光客にとって便利である。このほか現地のホテルが6軒ある (Cave: 51)。

カルタラはアラック醸造の盛んな町でもある (Cave: 52)。主要産物は、ココナッツ、茶、ゴム、稲、キンマ、シナモン、マンゴスチン、黒鉛などである。1,700エーカーの茶畑および数千エーカーのゴム園がある (Cave: 55)。

カツクルンダ駅：ここは人口約2千人の町で、レスト・ハウスもホテルも無い。ココナッツヤシが主要産物である (Cave: 55)。

パイヤガラ北駅：この駅は待合室もない簡単な乗客用の駅で、近くには宿泊施設もない。

パイヤガラ南駅：北駅より乗客にとっても商品の商売にとってもかなり重要なのが南駅である。この町は人口約7千人である。南北の駅からの通りはとくに美しい。訪問客

は召使をやって牛車を予約させれば、1マイル25セントである。ココナッツ、ヤシ酒、アラック、米、シナモン、ビンロウが主要作物で、茶やゴムもまた重要産業である。また、漁業も盛んで南駅からはコロンボに向けて毎月5トンほどの魚が積み出される。そのほか毎年、アラック210トン、黒鉛90トン、板材75トン、茶40トン、コブラ30トン、ビンロウ50トンも南駅から積み出される。建築用石材も重要である (Cave: 55-56)。

マゴヤ駅：マゴヤは人口約3千人の村で、ほとんどが漁民である。来訪者にとっては何のアトラクションも宿泊施設もない (Cave: 56)。

ベルワラ駅：セイロン有数の絵のように美しい海岸がある。それは魅力的な湾で、漁民たちが忙しくしている。ベルワラ・バザールはとくに活気がある (Cave: 56)。

アルトガマ駅：物資にとっても乗客にとっても心地よい駅で、リフレッシュ室も完備している。この地域で生産され鉄道で運ばれる産物には黒鉛、茶、珊瑚、ライム、アラックなどがある。この駅はまたベントタへの駅にもなっている。ベントタは美しい環境のなかにあり、静かなハネ・ムーン・リゾートである。ベントタ川は海に注いでいる場所で、そこのレスト・ハウスは海岸ではもっとも涼しい場所のひとつである。ここでもっとも魅力的なのは川である。ボートを借りればレスト・ハウスのすぐそばまで近づくことができるし、3～4マイルさかのぼって、素晴らしい体験ができる。セイロンで最も美しい仏教寺院を見ることがもできる (Cave: 56-57)。

インドラワ駅：ここは最も新しい駅である。人口約3千人で、ほとんどがココナッツや米、ビンロウ、シナモンなどの生産に従事している。これといったアトラクションはない (Cave: 57)。

コスガダ駅：この町と周辺へ拡大した30平方マイルの人口は約12,000人である。駅にも駅周辺にも旅行者用宿泊施設はないが、3.33マイルほど内陸に入ったウラガスマンハンディヤには政府のレスト・ハウスがあり、寝室が2部屋と管理人が調理する料理がある。そこへは牛車や馬をコスガダ駅で雇うことができる。村の西側へ行くと、稲田が点在する美しい丘のパノラマを見ることができる。そこには訓練用のキャンプがあり、トレーニング・グラウンドが絵のように美しい景色に囲まれている (Cave: 57)。この地域の産業は、籠製作、レース、銀や真鍮食器、ナイフ、車、精巧な彫刻家具、レンガ、陶器、コブラ、ココナッツ油、ココヤシ皮繊維、孔雀椰子の各種製品、シトロネア油、シナモンオイルや現地薬が含まれている。

バラピティヤ駅：人口約1,000人。スポーツ（狩り）のためや美しい風景を求めてベントタやアンバラゴダに滞在する訪問客のために、海岸や内陸に向かって広がるラグーンに各種施設が準備されている。アンバラゴダから3マイル、ベントタから11マイルのところに、南州の中でもっとも自然が美しい風景があり、レスト・ハウスに滞在するすべての客がそこを訪れることは容易である (Cave: 58)。

アンバラゴダ駅：セイロンを訪れるヨーロッパ人訪問者が喜ぶ宿泊施設や食事が

できる海岸がある。ここでの海水浴は完全に安全で充分楽しむことができる。このレスト・ハウスは寝室8部屋持ち最高に快適である。海岸へのスロープは天然の岩のバリアーに囲い込まれており、鯨の攻撃から海水浴客を守っている。アンバランバゴは人口2万5千人の町で、ココナッツ、茶、米、シナモン、やビンロウが主要産業である (Cave: 58)。

ヒッカドア駅：人口約4千人で、ココナッツやビンロウ、茶、米、シナモンを生産している。珊瑚石灰、黒鉛、や太鼓のフレーム、仏教寺院で使われる金属製ボウルなどの生産おこなわれている (Cave: 61)。

ドダンデュワ駅：ここは黒鉛と椰子皮繊維のロープで有名である。毎年前者は1,000トン、後者は300トンを供給している。駅のすぐ近くに自然の美しさがあるラトガマ湖がある。この湖は毎年の後半に、シギ狩に最高の場所になっている。また駅から6マイルのベダガマにはイギリス教会の最も古い伝道所が所在している (Cave: 61)。

ジントタ駅：人口約2,500人の村で、ほとんどがココナッツ栽培、ココヤシ繊維のロープ生産に従事している。来訪者にとって面白いのは、アダムス・ピーク付近から流れてくるジンガンガ川が海に注ぐ風景である (Cave: 61)。

ゴール駅：ゴールは南州の主要都市で州政府が置かれている (Cave: 61-65)。

タルペ駅：ここは主にココナッツ製品ののための貨物駅である。人口約千人で、付近にレスト・ハウスもホテルもない (Cave: 65)。

アーンガマ駅：人口約2千人で、茶、ココナッツ、パルミラ椰子、米、シナモン、シトロネラなどを栽培している。5平方マイルのコガラ湖は駅から2マイルである。ここでは狩り、とくにシギや野生のイノシシを手に入れることができる (Cave: 65-66)。

ウェリガマ駅：南海岸で楽しめる多くのスポーツを楽しめる。駅から4分の3マイルほどのところに快適なレスト・ハウスがある。おいしい食事、宿泊施設、ボート、馬車、各種の世話はいつでも整っている。フィッシングはとくに素晴らしい。訪問者が欲する多くの楽しみがここにはある。ウェリガマは人口約1万人で、ココナッツ、ビンロウ、シナモン、シトロネラ、黒鉛などを生産している。手工業としてはレース編み、椰子皮繊維ロープづくりがある (Cave: 66)。

カンプルガマ駅：人口約6千人、来訪客のための施設や宿泊場所はない。マータラまでほんの3マイルである。主な生産物はココナッツ、シトロネラそして野菜である。この駅から毎月10トン以上の南瓜を各地の市場に向けて積み出している。椰子皮繊維とレースが手工業の中心である。付近はしぎ狩に適している (Cave: 66)。

マータラ駅：現在海岸線の終着駅であり、人口約2万人の美しく、ニルガンガ川河口に位置する興味尽きない町である。マータラの主な楽しみのポイントはオランダ時代の遺産と関わりがある。2箇所のフォートとオランダ教会とがあり、17-18世紀にマータラが重要都市であったことを物語っている。小さなほうのフォートは星型でよく知られ

ているもので、1763年ヴァン・エリック総督によって建設された。現在星型フォートはマータラ・ディストリクトで働く官吏たちの宿舎になっている。大きなほうのフォートには、裁判所や副総督公邸などの公的施設が集まっており、旅行者のためには快適なレスト・ハウスがある。美しい木々に囲まれた絵のように美しい公園のような場所である。鰐から守られたニルガンガ川の水浴場がある。マータラはセイロン南部で各種のレクリエーション施設が揃っている町である。ゴルフやクリケット、ゲームを楽しむことができる。旅行者のための施設も整っている。駅には女性用の待合室があるし、駅から10分ドライブすれば素晴らしい寝室が7部屋、ダイニング・ホールとヴェランダをもつ政府のレスト・ハウスがある。荷馬車や牛車もある。主な生産物は、ココナッツ、米、キンマ、ビンロウ、胡椒、シナモン、料理用バナナ、シトロネラである。手工業には、籠造り、レース編み、宝石加工、家具製作などがある (Cave: 67-68)。

海岸線に沿って各駅周辺の街の様子、産業の紹介を含む旅行情報である。当時のイギリス人やヨーロッパの人びとがエキゾチックな南国の島を訪れて自然や産業を観察し、旅行を楽しむことのできる情報が盛り込まれている。

(2) 全島旅行コース

1914年発行のもう1冊の旅行書『How to See Ceylon』は、鉄道旅行ばかりでなく、道路に沿った旅行コースが全島くまなく紹介されている。ここではこの書物の目次を掲げて、当時の旅行コースを概観しておこう。

How to see Ceylon 目次

- I 歴史・居住者・旅行の方法など
- II コロンボとその周辺：マウントラヴェニア・ケラニヤ・ネゴンボ・ヘラナトゴダ・カルタラ・ゴール
グランドオリエントホテル・シナモンガーデン・コロンボ博物館・現地人居住地
域・ケラニヤ仏教寺院・マウントラヴェニア・ネゴンボ・シナモンとその歴史・ココナッツ・チロウ・パッタナム・ハナラトゴダ・ゴム栽培・ゴール・モラトワ・パナデュラ・カルタラ・アルトガマ・ゴール
- III コロンボからキャンディ：鉄道と道路の旅
コロンボ—キャンディ線・米作・路線の特徴・ポルガハウエラとオンワード・ランブッカナ・ケガラ経由コロンボからキャンディへの道路の旅・ヴェヤンゴダからキャンディへ・アヴィサウエラとジニガットヘナ溪谷経由でコロンボからキャン

- ディヘ・ネゴンボとクルネガラを經由してコロomboからキャンディへ
- IV キャンディ
- V ペラデニヤ道路
王立植物園・ペラデニヤ競馬場とゴルフ場・ヒンダサラ寺
- VI キャンディからヌアラエリヤ
ギニゲットハナおよびハットン經由ヌアラエリヤ・メイキングの茶・ハットンから
ヌアラエリヤ・ランボダパス經由でヌアラエリヤへ・クラギエレア經由でヌアラエ
リヤへ・ハットンからマスケリヤへ・アダムスピーク
- VII ヌアラエリア
山頂・湖とムーン平原・ペドロ・ハクガラ庭園・ヌアラエリヤカララガラへ・オヌ
オヤからハプタレとバンダラウエラへ・ディヤタラワ・ホートン平原
- VIII ヌアラエリアからバデュラ・バンダラウエラ・ホユタレ
バデュリア・バデュラとハプタレ
- IX ハプタレからラトナプラ
ラトナプラ・コロomboとネゴンボへ
- X ハプタレからティッサマハラマへ、さらにハンバントタ→タンガレ→マータラ→
ゴール, ティッサハラマ・ハンバントタ・タンガラ・ウエリガマ
- XI コロomboからアヌダーラプラへ鉄道の旅
各駅
- XII 道路で行くキャンディからトリンコメリエ, マータラ・ダンブラ・シギリヤ・ミネ
リア・ポロンナルワを經由して
シギリヤ・ポロンナルワ・ThuparamaとWata-da-ge・
- XIII トリンコメリからアヌダーラプラ→キャンディ温泉→アヌダーラプラ→ジャフナー
ムライティヴ→マンナー, 真珠養殖
- XIV トリンコメリエからバティカロア, バデュラとビンテンナを經由して戻る

19010年段階ではすでに全島をくまなく旅行するコースが確立され、紹介されている
ことがわかる。

参考文献

- 秋田茂編著『イギリス帝国と20世紀第1巻 バクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ
書房, 2004年
- Banks, J. D. N., "The History of the Hill Club" The Hill Club, Nuwara Eliya, Sri Lanka, 1988
- Breckenridge, S. N. "The Hills of Paradise" Stamford Lake Publication, 2001
- Cave, Henry W. "Ceylon along the Rail Track" The Ceylon government Railway, 1910 (= Visidunu

Publication, 2002)

- Fernando, Maxwell, "The Story of Ceylon Tea" Mleana (Ceylon) Limited, 2000
- 福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史—工業化と国民形成』岩波書店, 2005年
- 近藤和彦編『西洋世界の歴史』山川出版社, 1999年
- Knox, Robert 1681 "An Historical Relation of the Island Ceylon" (=濱屋悦次訳『セイロン島誌』平凡社, 1994年)
- 村岡健次・木畑洋一編『世界歴史大系 イギリス史3—近現代—』山川出版社, 1991年
- 根橋正一, 2005a「世界経済システムと国際観光」『社会学部論叢』第15巻, 第2号, 2005年3月
- 根橋正一, 2005b「日本植民地時期台湾における国際観光の成立」『社会学部論叢』第16巻, 第1号, 2005年10月
- 根橋正一, 2006a「17世紀グランドツアーの社会的基礎—ワールドシステムとナショナリズム」『社会学部論叢』第16巻, 第2号, 2006年3月
- 根橋正一編, 2006b『科研報告書 アジア諸国における観光文化に関する包括的研究』
- 小野功生・大西晴樹編著『<帝国>化するイギリス—十七世紀商業社会と文化の諸相』彩流社, 2006年
- Pendergrast, Mark "Uncommon Grounds: The History of Coffee and How It Transformed Our World" 1999, (=樋口幸子訳『コーヒーの歴史』河出書房新社, 2002年)
- Royston, Ellis "Sri Lanka by train" Bradt Publication, 1994
- 角山栄『茶の世界史—緑茶の文化と紅茶の社会—』中央公論社(中公新書), 1980年
- 白井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る—近代市民社会の黒い血液—』中央公論社(中公新書), 1992年
- Wright, Arnold ed. "Twentieth century Impressions of Ceylon: Its History, People, Commerce, Industries, and Resources" Lloyd's Greater Britain Publishing Company, 1907=Reprint by Asian Educational Services, New Delhi, Chennai, 2004
- 山本雅男『ヨーロッパ〈近代〉の終焉』講談社(現代新書), 1992年
- 横井勝彦『アジアの海の大英帝国—19世紀海洋支配の構図—』講談社(学術文庫) 2004年